



**東京国立博物館特別展「縄文－1万年の美の鼓動」に  
幸田貝塚出土資料（国指定重要文化財）が展示されます**

1 概 要

松戸市立博物館蔵・幸田貝塚出土資料（国指定重要文化財）のうち、12点を東京国立博物館特別展「縄文－1万年の美の鼓動」開催のため貸し出します。

全体構成8章のうち、第2章「美のうねり」で展示される予定です。この章は、縄文時代前期「縄文で埋め尽くされた美」・中期「貼り付けされた美」・晩期「描かれた美」に焦点をあてた構成になっており、このうち前期の特徴的な資料群として幸田貝塚出土資料が展示されます。

2 開催期間 平成30年7月3日（火）～9月2日（日）

3 主 催 東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社

4 会 場 東京国立博物館平成館

5 添付資料

- (1) 資料写真と解説（12点中の4点）
- (2) 企画書（東京国立博物館）

【問い合わせ先】

生涯学習部 博物館

☎047-384-8181



1 深鉢形土器



2 深鉢形土器



3 片口付深鉢形土器



4 片口付深鉢形土器

## 写真解説

### 1. 深鉢形土器 縄文時代前期(約 6,500 年前)

5つの頂点を有する波状口縁があり、均整のとれたプロポーションの土器。

高台付きである点が珍しい。2006年にカナダ、モントリオール考古歴史博物館「日本展」(JAPAN)で展示された。

### 2. 深鉢形土器 縄文時代前期(約 6,500 年前)

ループ文(口縁部・胴部くびれ部など)、羽状縄文(胴下部)、コンパス文(波状にみえる文様)など、この時期の土器文様の特徴の多くがこのひとつの土器に集約されている。2006年にカナダ、モントリオール考古歴史博物館「日本展」(JAPAN)で展示された。

### 3. 片口付深鉢形土器 縄文時代前期(約 6,500 年前)

波状口縁の土器で、4つの波頂部がある。波頂間に片口(注ぎ口)が付くのは珍しい。土器の地文様は組紐文とよばれ、この時期の土器にみられる特徴である。1998年にパリ、日本文化会館「縄文展」(JOMON)で展示された。

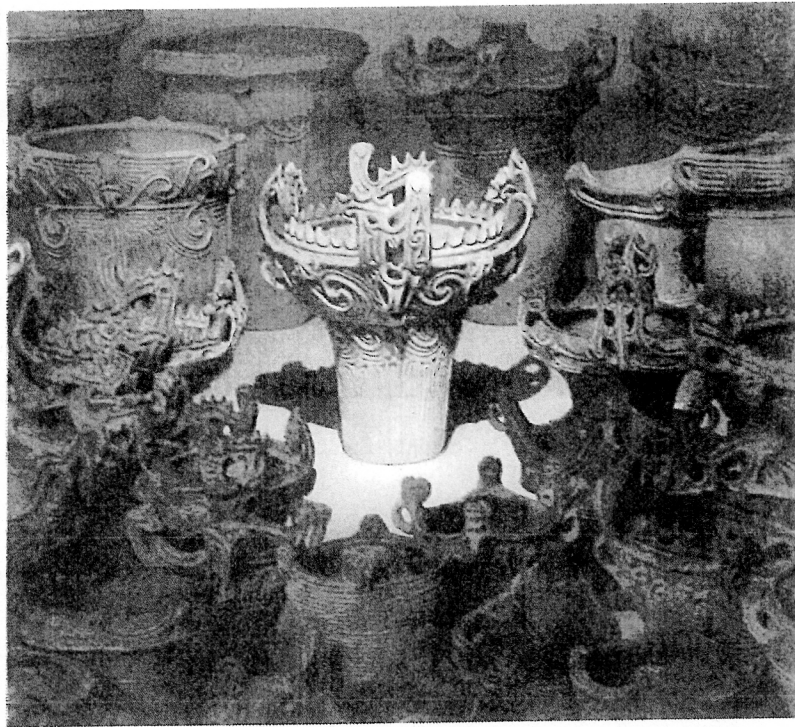
### 4. 片口付深鉢形土器 縄文時代前期(約 6,500 年前)

平らな口縁に片口が付く土器。片口の上につく山形の突起は、上澄みを取り除く時に内容物が流出するのを防ぐための形状と考えられている。

2006年にカナダ、モントリオール考古歴史博物館「日本展」(JAPAN)で展示された。

# 特別展「縄文—1万年の美の鼓動」

企 画 書



2017年8月

## ● 企画趣旨 ●

---

今から1万3千年前から約1万年の長きに渡って日本列島に生きた私たちの祖先、縄文人。彼らの遺した土器や土偶は、身近な材料を使って巧みな技術でつくられた、力強くも神秘的な造形である。

縄文時代とは、人々が自然と共生しながら採集・漁猟・狩猟・栽培を行い、高度な技術と文化を生み出す知性を持ち、遠く離れた地域と交流をした定住社会であった。このことは、全国各地の遺跡から出土したさまざまな色や形の石器や骨角器、木器や漆器などが雄弁に物語っている。また、縄文土器や土偶に見られるダイナミックな造形は、世界史的に見ても独創的なものである。1950年代に岡本太郎らが芸術的価値を見出したと言われる縄文の美は近年再び注目が集まり、現在火焰型土器や5つの土偶が国宝に指定されている。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて日本への注目が高まるこの機会に、日本文化の源流ともいえる縄文の美と文化を広く紹介する展覧会を開催したい。

## ● 開催概要案 ●

---

1. 名称 特別展「縄文—1万年の美の鼓動」
2. 会場・会期 2018（平成30）年7月3日（火）～9月2日（日）  
東京国立博物館 平成館
3. 主催 東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
4. 概要 国宝に指定されている縄文土器や土偶を一堂に紹介するほか、1万年もの長きにわたって続いた縄文時代の人々の豊かな感性と力強い造形美のうねりをさまざまな出土品を通して体感してもらう。
5. 監修 東京国立博物館
6. 事務局 NHK 事業センター 田中良憲、山田卓司  
〒150-8001 東京都渋谷区神南 2-2-1  
電話：03-5455-6540 FAX：03-3481-1372
- NHKプロモーション 宮崎裕子、市川正江、小淵祐子  
〒150-0047 東京都渋谷区神山町 5-5  
電話：03-5790-6424 FAX：03-5790-0308
- 朝日新聞社 企画事業本部文化事業部 辻直美、吉羽陶子  
関真麻  
〒104-8011 東京都中央区築地 5-3-2  
電話：03-5540-7450 FAX：03-3546-1894

## ● 企画内容 ●

---

### 1章 縄文とは一日々の暮らしに秘められた美

縄文時代とは、氷河時代が終わった前11,000年頃から約1万年間続いた新石器時代を指します。この章では、縄文時代やその文化を紹介するとともに、当時の人々が日々の暮らしを支えるために作った様々な道具に潜む知恵や技、そして美意識をご紹介します。

### 2章 美のうねり—1万年続いた美の移り変わり—

誰もが知っている縄文土器といえば造形力に満ち溢れる火焰型土器が著名ですが、実は縄文時代の一時期—地域(縄文時代中期中葉・信濃川流域・新潟県)に盛行したもの。1万年も続いた「縄文の美の流れ」の中のほんの1コマです。この章では、大きなうねりをもって移り変わる縄文の美のながれをご覧ください。

### 3章 美の競演—世界史の中の縄文土器—

縄文土器の類まれなる造形力は、世界史のなかでも極めて卓越したもの。とは言っても世界各地の土器と縄文土器を実際と一緒に見比べてみたことがある人は少ないでしょう。この章でアジアやアフリカ、そしてヨーロッパの新石器時代の土器と見比べることによって、縄文時代の人びとが土器に込めた想いを探ります。

### 4章 縄文美の最たるもの

1万年も続いた縄文時代にはあまたの形が作られました。なかでも群を抜く存在感を示しているのが、国宝火焰型土器や5体の国宝土偶です。縄文時代には決して同じ場に集うことのなかった、これらの形。縄文力が凝縮されたともいえるこれらの造形をご堪能ください。

### 5章 祈りの美、祈りの形

祈りの造形ともいわれる土偶。その姿は縄文時代を通して女性像で表され、生命の再生や豊穡にかかわるとされています。気高く厳めしい印象を与える土偶もありますが、多くは笑みを誘うようなユニークでユーモラスな形の土偶です。まだ誰も気づいていない土偶の魅力を発見してください。

## 6章 伝える美—想いを運ぶ器—

縄文土器は一般的に抽象的な文様で飾れますが稀に人や動物を表現するものがあります。これら土器は容器としてだけでなく、器を使う人とそこ描かれた人形や動物との仲立ちをする役割を果たしていたと考えられています。縄文人は器に何を込めたのか。ぜひ覗き込んでみてください。

## 7章 美を求めるころ—飾り、装う—

今と変わることなく縄文時代の人びともその身を飾り装っていました。その意図するところは単に見栄えではなく、身に着けることによって男女や年齢、そして自身の来歴を示すためでもあったのです。ときに魔を退ける役割さえも果たしたといわれる縄文時代の装身具。うち秘めたるその力を感じ取ってください。

## 8章 新たにつむがれる美—縄文と現代—

日本では明治時代になって大森貝塚の発掘をきっかけに考古学が始まり、「縄文」が発見されます。この「縄文」とは異なる「縄文」の魅力を見出したのは考古学者ではなく作家・芸術家でした。その一人が岡本太郎ですが、彼にとって「縄文」の魅力との出会いの場はこのトーハクだったのです。彼らが遭遇した「縄文」とは何か？多くの作り手が愛玩した品々をもとに「縄文」の魅力をいま一度考えます。